

# 教科教育における指導方法・指導体制の工夫改善に関する研究 小・中学校における習熟度別指導の実践の分析を通して

## 【研究者】

教科教育部 部長 久家 光雄  
主任指導主事 門脇 治隆  
指導主事 大里 章裕・中本 和彦・山本 浩史・山下 規之・田中 勲  
緒方 耕・島田 俊明・佐伯 眞一郎・廣井 早世

【研究指導者】 広島大学大学院教育学研究科 教授 森 敏昭

## 【調査対象校】

東京都品川区立伊藤小学校 東京都品川区立第二日野小学校  
東京都品川区立富士見台中学校 東京都品川区立荏原第三中学校

### 研究の要約

本研究は、基礎・基本の確実な定着を図るための指導方法・指導体制の工夫改善の一つとして、習熟度別指導の実施に係る視点・方法を明らかにしようとしたものである。児童生徒の習熟の程度に応じた指導を適切に実施するためには、必然的に指導内容、指導方法、評価の在り方等を検討し、工夫改善しなければならない。

そこで、文献研究から習熟度別指導の定義やねらいを明らかにし、習熟度別指導実施の視点として、学校体制、学習集団、教材、展開方法、評価を挙げ、習熟度別指導の先進的な実践の分析を通して、基礎・基本の定着を図った習熟度別指導の実施に係る視点・方法について明らかにしようとした。

その結果、習熟度別指導の実施に係る視点・方法について、学校体制として整備しなければならないハード面とソフト面、学習集団の編成の仕方、教材づくりの考え方と方法、学習過程における習熟度別指導の展開方法、評価の視点と方法から探ることができた。

**キーワード：**指導方法 指導体制 習熟度別指導

## 目次

はじめに	181
研究の概要	182
研究の基本的な考え方	183
調査対象校の実践	186
分析と提言	197
おわりに	200

## はじめに

現在、学校が提供する教育内容の質的な改善をいかに図っていくかという大きな課題があり、それに対して次の2点が模索されている。

1点目は、学力観とカリキュラムの改善である。学力観としては、昭和40年代後半から思考力や判断力等が、昭和50年代後半からは学習意欲や自己教育力が重視されてきた。さらに、平成に入って自ら学

び自ら考える力が重視されるようになってきている。カリキュラムについても、選択学習の拡大や総合的な学習の時間の創設、体験学習の充実等が新しい動きとして出されてきている。こういった状況を踏まえ、各学校においては教育内容の改善が図られている。

2点目は、指導方法・指導体制の工夫改善である。個に応じた指導の展開を進める動きの中で、指導形態や指導方法についても改善が図られ、個別指導や少人数指導、習熟度別指導等が導入され始めている。多様な指導形態や指導方法が導入されることにより、個に応じた指導がこれまで以上に可能になりつつある。

平成10年の教育課程審議会答申では、学習指導要領の改訂のねらいに「ゆとりのある教育活動を展開する中で、基礎・基本の確実な定着を図り、個性を

生かす教育を充実すること」を掲げた。ここでいう「基礎・基本の確実な定着」と「個性を生かす教育」の二つが、指導方法・指導体制の工夫改善の一つである習熟度別指導と深く関係してくる。

この答申では、これまでの学力観を転換するとともに指導内容を基礎的・基本的な内容に厳選し、それらの内容については確実な習得を図ることを指摘している。この課題を受けて、学習指導要領総則では小・中学校とも個別指導やグループ別指導、教師の協力的な指導についての記述がなされ、小学校では繰り返し指導、中学校では学習内容の習熟の程度に応じた指導を行うことにより、学習内容を確実に身に付けさせることの重要性が述べられている。

また、個に応じた指導の充実について、工藤文三が三つの側面から述べていることをまとめると次のようになる。

・児童生徒の特性や実態に着目する側面

児童生徒一人一人の興味・関心や学習意欲に着目することによって、児童生徒の主体的な学習を進めることができる。また、各教科等の学習状況や学び方等に注目することによって、学習状況に応じた個別指導や少人数指導等の取組みができる。

・指導計画の側面

個に応じた指導を進めるために、指導内容や教材、学習方法等を複数に分けて設定し、指導計画を複線型にして選択学習を進めることができる。

・指導形態や指導方法の側面

一つの学級に複数の教師を配置したり、学級を複数の学習集団に分けて指導したりする方法がある。その場合、教師の指導に着目すればチーム・ティーチングとなり、学習集団に着目すると少人数指導となる。習熟の程度に応じた指導とは、各教科等の学習状況や学び方に着目した指導といえる。

今回は、この指導形態や指導方法の側面に着目して研究を進めることとする。

これまでも高等学校や中学校において習熟度別指導は行えるようになっていたが、実施及び内容において十分とはいえない。また、小学校においては平成 15 年 10 月の中央教育審議会答申を受けて、習熟度別指導は平成 16 年度から制度的に実施できるようになった。今日、基礎・基本を児童生徒に身に付けさせるための習熟度別指導の充実が強く求められているといえよう。

**研究の概要**

**1 研究の目的**

児童生徒一人一人に基礎的・基本的な内容の確実な定着を図るために、少人数指導、習熟度別指導、複数教師による協力的指導などの指導方法・指導体制を工夫することが求められている。本県においても、この趣旨を踏まえて「はばたきプラン」「はつらつプラン」等の施策を展開し、指導方法・指導体制の充実を図ることで基礎・基本の定着に努めているところである。しかし、平成 14 年度「基礎・基本」定着状況調査（広島県）によると、習熟の程度に応じた指導の実施率（授業時間全体のうち実施した時数の割合）の平均は、小学校国語科 3.6%、算数科 7.3%、中学校国語科 0.9%、数学科 3.4%、外国語科 1.5%と極めて低調であり、習熟度別指導を積極的に取り入れた授業改善はほとんど進んでいないのが現状である。

児童生徒の習熟の程度に応じた指導を適切に実施するためには、必然的に指導内容、指導方法、評価の在り方等を検討し工夫改善しなければならない。

そこで、本研究では、習熟度別指導について先進的な取組みを進めている学校の実践内容等について調査・分析を行い、基礎・基本の定着に資する習熟度別指導の実施に係る視点・方法について明らかにしていきたい。

**2 研究の内容と方法**

**(1) 研究の内容**

- 習熟度別指導に係る理論研究
- 先進校の実態調査と分析
- 習熟度別指導の実施に係る視点・方法についての提言

**(2) 研究の方法**

- 文献研究
- 調査研究

**3 研究の計画**

研究内容	期間
研究計画書の作成	4月
理論研究	5月～6月
第1回研究会議	6月
実態調査の内容・方法の検討	7月
実態調査の実施	7月～9月
実態調査結果の分析・考察	9月～11月
第2回研究会議	12月
研究のまとめ及び研究報告書の作成	12月～2月

## 研究の基本的な考え方

### 1 習熟度別指導の定義とねらい

#### (1) 習熟度別指導の定義

「習熟度別指導」ということばは、学校等の研究報告書や文部科学省が提示する資料等において一般的に用いられており、ことばとしては定着している。しかし、そのとらえ方には様々なものがあり、特に次の2点において「習熟度別指導」のとらえ方に差異がある。

児童生徒の興味・関心に応じた学級・グループ別指導を、「習熟度別指導」に含めるのか。

習熟度別学級を1年間固定化して行う指導を、「習熟度別指導」に含めるのか。

は「習熟」の中身をどのようにとらえるのかという問題であり、は「習熟度別指導」をどのように行うのかという問題である。

まず、について整理する。「習熟」については、新教育学大事典に記されている「既習の知識、技能等が反復、練習、応用等を通じて定着ないし高度化すること」といったようなとらえ方が一般的である。また、学習指導要領に「習熟度別指導」ということばそのものは出てこないが、中学校学習指導要領総則にある「学習内容の習熟の程度に応じた指導」と同義であると考えることができる。さらに、平成12年の教育課程審議会答申では「児童生徒の興味・関心、進路、習熟度などに応じ」と記して「興味・関心」と「習熟度」を分けていることから、「習熟度別指導」とはあくまでも「学習内容」の定着度に応じた指導であるといえる。ただし、「学習内容」については、「知識・理解」のみに着目するのではなく、学習状況を評価する四つの観点を踏まえてとらえるよう留意する必要がある。

次に、について整理する。中学校学習指導要領総則の解説に、学習内容の習熟の程度に応じた指導の「実施に当たっては、学校の実情等に応じ、必要な教科について適宜弾力的、流動的に行うこと、実施時期、指導方法、評価の在り方等について検討して実施することなどの配慮が必要である。」と記されていることから、「習熟度別指導」はあくまでも必要に応じて弾力的、流動的に行うものであるといえる。

以上のことから、「習熟度別指導」とは、「児童生徒の学習内容の習熟の程度別に学級あるいはグループを弾力的、流動的に編成し、それぞれに指導すること」である、と整理できる。

#### (2) 習熟度別指導のねらい

昭和46年の中央教育審議会答申の中で、初等・中等教育の改革に関する基本構想の一つとして「個人の特性に応じた教育方法の改善」が求められ、それまで画一的に行われがちであった日本の教育を改善する必要性が述べられている。その後、学習指導要領や臨時教育審議会答申、教育課程審議会答申等において個性を生かす教育の充実が求められるようになった。

平成10年の教育課程審議会答申では、「一人一人の興味・関心を生かした指導や、学習内容の理解や習熟の程度に応じ、弾力的に学習集団を編成したり、学級編成を弾力的に行うなど、個に応じた指導の工夫改善を一層進める必要がある。」とあり、それを受けて平成10年の小学校学習指導要領では、「児童が学習内容を確実に身に付けることができるよう、学校や児童の実態に応じ、個別指導やグループ別指導、繰り返し指導、教師の協力的な指導など指導方法や指導体制を工夫改善し、個に応じた指導の充実を図ること。」、中学校学習指導要領では、「生徒が学習内容を確実に身に付けることができるよう、学校や生徒の実態に応じ、個別指導やグループ別指導、学習内容の習熟の程度に応じた指導、教師の協力的な指導など指導方法や指導体制を工夫改善し、個に応じた指導の充実を図ること。」と述べられている。

しかし、「学習内容の習熟の程度に応じた指導」が小学校学習指導要領の「個に応じた指導」に例示されていないことで、学校現場の取組みには温度差がみられていた。

平成15年10月の中央教育審議会答申では、基礎・基本を徹底する上での個に応じた指導の方法等を場面に応じて柔軟かつ多様に導入することなどを求め、学校による創意工夫の必要性が述べられている。また、小学校の学習指導要領の記述を見直し、例示として習熟度別指導を追加することにも触れている。

以上のことから、習熟度別指導のねらいは、「児童生徒一人一人に学習指導要領に示す基礎的・基本的な内容の確実な習得を図る」ところにあるといえる。

### 2 習熟度別指導実施の視点

習熟度別指導を実施していく際、どのような視点から考えていけばよいかについて、明確に述べている文献は見当たらない。様々な文献で述べられている視点を踏まえ、学校体制、学習集団、教材、展開方法、評価の5点に分け、各々について整理した。

#### (1) 学校体制

習熟度別指導を行う上で必要な学校体制は、ハー

ド面とソフト面に分けて考えられる。ハード面とは人的・物的な環境整備などを、ソフト面とは習熟度別指導についての教職員間の共通理解や学習方法等の工夫改善などをいう。

ハード面について岩崎三郎（平成 14 年）は、「習熟度別指導は同時に複数の教員があたったほうが効果的である。」と述べている。また、国立教育政策研究所の調査によると、20 人以下の少人数学級は、それ以上の大きな規模の学級より理数系の成績がよいという結果が出ている。

平成 12 年 5 月、旧文部省の「教職員配置の在り方等に関する調査研究協力者会議」は、新たな教職員配置改善計画を盛り込んだ報告書を文部大臣に提出した。これを受けて文部省は平成 13 年 4 月「公立義務教育諸学校の学級編制及び教職員定数の標準に関する法律」等を改訂し、第 7 次教職員定数改善計画を開始した。

文部科学省は、次のような指導に対して加配教員や非常勤講師を当てるなどの支援をしている。

- ・ 学習の理解の状況や習熟の程度に差が生じやすい教科や言語的な表現力・理解力など他の教科の学習の基盤となる能力を培う教科の指導
  - ・ 実践的コミュニケーション能力の育成が必要な教科の指導
  - ・ 選択教科や総合的な学習の時間をはじめ児童生徒の体験的で問題解決的な学習を重視する指導
- こういった支援等により、教員一人あたりの児童生徒数が欧米並みの水準に改善されつつある。

では欧米各国とほぼ同じ水準に達していることが分かる。このように人的整備は進んできたが、教員だけでなく地域の人材の協力を得ることも重要である。

また、習熟度別指導を行うためには教室の配備も重要である。習熟度別指導を行うための空間として、教室、特別教室、余裕教室、多目的スペース、学習コーナー、校庭、広場及び体育館等が挙げられる。このようなハード面を工夫して活用していくためには、学校全体の取組みが不可欠である。

次にソフト面について、岩崎（平成 14 年）は、習熟度別指導にあたって最も重要な問題は「協力し合う複数の教員が、学習課題の特性や子どもの学習のつまずきについて、共通の認識をもち、共通の指導観をもつことである。」と述べ、そのために「日頃からオープンな研究態度をもち、自由に意見を交換するという、友好的で協力的な教師関係を作り上げておく必要」があると述べている。

学校体制として重要な視点として挙げられるのが、教職員間の習熟度別指導に対する共通理解である。習熟度別指導を行うには、かつてのように一部の教員が行うのではなく、学校体制の確立が重要な要素となる。

また、学校として習熟度別指導をどのような教科、学年で行い、どのように時間割に組み込むか、そしてそれらについて保護者や児童生徒にどのように説明をするかが、学校体制として習熟度別指導を行うときの重要な視点となる。

## (2) 学習集団

習熟度別指導の学習集団編成は、「いつ」「どこ」「だれ」という三つの視点からみることができる。すなわち、習熟度別指導の学習集団編成は、展開方法との関係から、母集団との関係から、そして主体との関係からみることができる。

まず、「いつ」習熟度に応じた集団とするか、という展開方法にかかわる視点からは、二つの学習集団編成の方法をみることができる。一つは、指導に先立って習熟の程度を測定し、その結果に基づいてコースを設けて指導を行うというものである。そしてもう一つは、一斉指導をして次に何らかの習熟の程度を測定し、これを形成的評価として、その結果に基づいてその後に習熟度に応じた指導を行うというものである。（詳しくは展開方法で述べる。）

次に、「どこ」を習熟度に応じた集団とするか、という母集団にかかわる視点からは、先に述べたものとは異なる二つの学習集団編成の方法をみることができる。一つは、学級内で習熟度の差を問題とし、

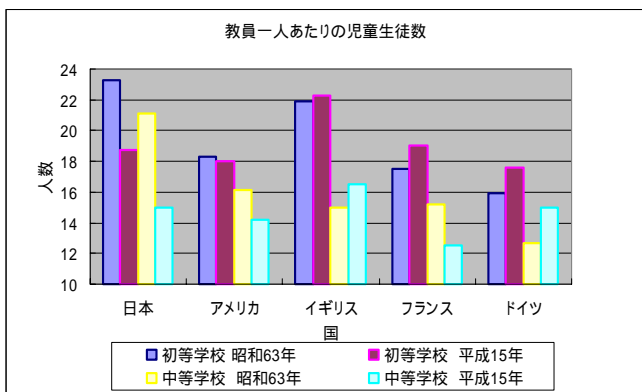


図 1 各国公立学校の教員一人あたりの児童生徒数

図 1 は昭和 63 年版及び平成 15 年版「教育指標の国際比較」を基に、各国公立学校の教員一人あたりの児童生徒数をグラフで示したものである。これを見ると、特に中等学校における日本の教員一人あたりの児童生徒数は、昭和 63 年と比較して平成 15 年

学級内で学習集団を編成するというものである。そしてもう一つは、学級を超えて複数学級で習熟度の差を踏まえ、複数学級で学習集団を編成するというものである。

そして三つ目の視点、「だれ」が習熟度に応じた集団とするか、という主体にかかわる視点からは、次のような学習集団編成の方法をみることができる。教師が学習集団を編成するというものと、児童生徒が学習集団を選択するというものである。そして、希望に応じたコース間の移動を可能とする場合と可能としない場合が加わる。この三つ目の視点にかかわって、工藤文三（平成13年）が述べる、次のような点に留意する必要がある。

「第一は、生徒による自主的なコース選択を基本とすることである。そのためには、生徒一人一人の学習の状況を把握しておくことが必要である。特に教科の学習のどの部分がどのように不足しているのか、この点を生徒自身に理解させておくことが大切である。第二は、希望に応じてコース間の移動を可能にしておくことである。第三は、習熟の程度に応じた展開の趣旨を生徒だけでなく、保護者にも十分伝えておくことである。」

以上のように「いつ」「どこ」「だれ」という三つの視点からは、様々な学習集団編成の方法をみることができるが、現実には、これらの方法を適切に組み合わせ、学習集団を編成していくことが大切である。

### (3) 教材

児童生徒の習熟の程度に応じた教材づくりを考えると、習熟の程度の高い児童生徒に応じた教材と習熟の程度の高い児童生徒に応じた教材が考えられる。

習熟の程度の高い児童生徒に応じた教材の考え方について、安野功（平成13年）が「学習指導要領に示す内容を十分に理解している子どもについては、その理解をいっそう深めるなどの発展的な学習を工夫し、一人ひとりの個性や能力等に応じた学習を充実させることにも配慮する必要がある。」と述べているように、学習指導要領で示された内容を身に付けた児童生徒に対する発展的な教材が考えられる。学習内容をより深めるもの、学習内容を広げるもの、そして学習を先に進めるものといった視点が考えられる。

また、教材に必要な条件として次の3点がある。1点目は、児童生徒が選択できるものであること。2点目は、学習指導要領で示されている内容と関連

のあるものであること。3点目は、児童生徒にとって負担加重にならないものであること。

習熟の程度の高い児童生徒に応じた教材は、児童生徒が学習指導要領に示された基礎的・基本的な内容を確実に身に付けられるものでなければならない。個別指導や少人数指導などでいねいできめ細かな指導に適した教材、視聴覚教材や具体物などを多く活用して理解を容易なものにした教材、あるいは学習内容を細分化した教材などが挙げられる。

### (4) 展開方法

習熟度別指導の展開方法として、次の二つが考えられる。

一つ目は、一定期間のはじめから習熟の程度に応じた学習集団で学習を展開する方法である。

年度当初、学期当初、あるいは単元の最初に児童生徒の習熟の程度を測定し、その結果に基づいて学習集団を編成し、一定期間のはじめから習熟の程度に応じた学習集団で学習を展開するものである。

数学年にわたって系統的に学習する教科で特に有効な方法であると考えられ、児童生徒が自分のペースに合わせて学習することができるなどの利点がある。学期の終了時点など必要に応じて学習集団を弾力的に再編成して学習展開することも可能である。

二つ目は、1単元や一つの学期など一定期間の中で、一斉指導を組み合わせ、習熟度別指導を展開する方法である。

例えば、一定期間のはじめには一斉指導を行い、その後習熟の程度を測定・評価し、一定期間の残りを習熟の程度に応じて編成した学習集団で学習を展開するものである。また、1単位時間の授業の一部を一斉で展開した後、授業の残りの時間に学級を習熟の程度に応じて編成したグループに分割して学習を展開する方法もある。教材の説明などは一斉で指導し、問題演習など個人の活動は習熟の程度に応じたグループで指導するなどの展開方法が考えられ、それぞれの指導で費やす時間も臨機応変に工夫することができる。この場合、ティーム・ティーチングを取り入れることにより、より細かな指導を行うことが可能となる。

### (5) 評価

評価に係る視点としては、目的、時期、方法の3点が挙げられる。ただしこの3点は独立したものではない。目的に応じて評価の時期や方法はある程度限定されるだろう。特に習熟度別指導の評価を考えると、学習集団の編成替えが年度途中に行われることを考慮して、年間評価計画を立てておきたい。

昭和 56 年に福島県教育センターがまとめた「習熟度別学習研究の手引」では、習熟度別指導の評価方法として次の五つが挙げられている。実際の評価にあたっては、学習展開に合わせ、これらの評価方法を適宜組み合わせることを考えたい。

診断的評価とは、個人または集団に対し、一定の指導計画が実施される以前に、よりよい指導計画を立案するための資料を求める目的で行う評価であり、レディネステスト等によって主に習熟の程度を測定するものである。

形成的評価とは、学習過程の中で教師の指導と生徒の学習を改善、調整するための評価であり、主として、どの目標が達成され、どの目標が達成されていないかについて評価情報を求めるものである。

総括的評価とは、一定期間の学習指導が終了した後、その期間における学習目標とその内容について、生徒の習得状況を総括的に確認するために行う評価であり、指導計画の終了後におけるその計画の反省や今後の改善に役立てるものである。

参加度評価とは、学習に対する意欲や態度に関する評価であり、出席率や宿題・ノートの状況、観察法による授業中の様子の記録などを基に、学習に対する参加度を測ろうとするものである。

伸長度評価とは、個々の生徒の学習の伸長度に関する評価であり、形成的テストにおける学習活動の事前と事後の成績の変動など、個々の生徒の伸び具合をみるものである。

## 調査対象校の実践

平成 15 年 3 月に東京都教育庁指導部が出した資料「少人数学習集団による指導の充実」では、8 校の習熟度別指導の実践を紹介している。その中で 3 校が品川区の学校であり、品川区では習熟度別指導を先進的に進めているといえる。

次に掲載する実践内容は、独自の考え方や指導方法を工夫している品川区の 4 校の実践を、習熟度別指導の実施に係る視点ごとにまとめたものである。

### 1 学校体制

#### (1) 品川区立伊藤小学校 教職員間の共通理解

全学年の国語科、算数科で習熟度別指導を実施している。

教職員間の共通理解については、校長の経営的コンセプトを基に、まず全員で実践することが大切で

あると考えている。その実践の成果が上がることによって教職員の意識が変わり、共通理解が得られている。

習熟度別指導の導入に際しては、次の項目を確認して導入していった。

- ・経営的コンセプトはあるか。
- ・実施学年は明らかになっているか。
- ・学習集団の編成は明らかになっているか。
- ・指導形態は明らかになっているか。
- ・実施教科は明らかになっているか。
- ・実施単元は明らかになっているか。
- ・指導時間は明らかになっているか。
- ・指導する上での工夫を明らかにしているか。
- ・児童の変容についての把握方法を明らかにしているか。
- ・効果・成果の確認方法を明らかにしているか。
- ・学習環境（場）は工夫されているか。
- ・全教員による実践を通して、教職員の共通理解がなされているか。
- ・人員の確保・配置は明らかになっているか。
- ・予算はあるか。

#### ア 習熟度別指導実施の視点

平成 13 年度から児童に基礎的な学力を着実に身に付けさせ、一人一人の個性や能力をさらに発揮させるために、全学年で算数の授業の少人数学習を進めてきている。さらに、算数のすべての単元で少人数学習集団による習熟度別指導を行ってきている。平成 14 年 5 月に行った学力調査の結果から、一定の成果を確認することができたが、基礎・基本が十分身に付いているとはいえない児童が数%いる状況があった。

そこで、これからは、更にきめ細かい指導や新たな指導方法の開発が必要であると考えている。また、基礎・基本をしっかりと身に付けた児童には、更に発展した学習に取り組んで自分の力を伸ばしていく機会を設け、一人一人の個性や能力に応じた学習が進められるように工夫していくようにしている。

以上のことから、次の 2 点を通して習熟度別指導を展開していくことにしている。

単元を通して、学級や学年を 12~15 人ほどの少人数に分割し、習熟度別指導を中心とした少人数学習を行い、基礎・基本を着実に身に付けさせる。

単元の内容に応じて習熟度別学習や課題別学習を効果的に組み入れた単元計画をつくり、一人一人の個性や能力に応じた学習を行う。

## イ 習熟度別指導の工夫改善

平成 14 年度は、習熟度別指導による指導方法の研究について、児童の基礎学力の定着と一人一人の児童の能力の伸長に向けて、習熟度別指導の在り方、個別指導の在り方などについての平成 13 年度の研究の成果を生かし、残された課題である評価に重点をおき意図的、系統的な学習が展開できるように工夫してきている。そして算数科と国語科において、習熟度別指導を積極的に取り入れていくことにしている。

工夫改善の視点は、次の 3 点である。

### 指導方法・指導体制の工夫

少人数学習担当 3 名が、それぞれ低・中・高学年を担当し、学級担任と共に習熟度別指導を行う。学級二分割、学年三・四分割の方法で実施する。

### 学習計画の工夫

一斉指導によって単元で押さえる基礎・基本を共通に理解し、児童の実態や学習状況に応じた指導計画を立てる。(どこで、どれくらいの時間、どんな方法で習熟度別指導を計画するか)

学年と少人数学習担当の役割分担、話し合う時間の確保の仕方を考える。

### 評価の工夫

児童にも教師にも目に見える形の評価を考える。(学習カードの工夫、自己評価カードの工夫、ノート指導及び評価の工夫など)

児童の学習状況把握テストの内容吟味、児童の学習の振り返りの記録など具体的に考えていく。

### 指導体制

担任、少人数加配、指導助手(品川区が習熟度別指導のために配置した助手)、教育実習生のボランティアで指導している。

### 時間割

少人数学習担当 3 名が低学年、中学年、高学年担当として、各学級の算数の少人数学習の授業に毎日 1 時間、習熟度別指導を入れることができるように時間割を作成している。

学年三・四分割授業は、学級担任 2 名と少人数担当 1 名、指導助手 1 名の計 4 名が同じ時間に指導に当たれるように時間割を作成している。

第 1 学年の一学期は、チーム・ティーチングで行い、その後、少人数学習を行うようにしている。

### 学習場所

特別教室や準備室等、使用できる教室はすべて活用し、各階ごとに習熟度別指導が行える学習室を設定し使用している。

## 児童生徒、保護者への説明

### ア 児童への説明

現在、初めて習熟度別指導を行う学年には、学習に入る前にオリエンテーションを行い、学習の目的や方法を説明している。

また、コース選択は「振り返りカード」を基に行うため、自己評価が適切に行われるように学習資料をどのように活用するのかを説明している。

指導上の留意点としては、「自分に合った自分のための学習」であることを指導し、児童が学習コースを選択したり、コースを変更したりし、教師は学習の場の配置を工夫して、差別感をもたせないように配慮している。

### イ 保護者への説明、理解の求め方

#### 平成 13 年度

・ 5 月 8 日に臨時保護者会(16 時～と 19 時～の 2 回)を開いて、少人数学習のねらいや方法について説明している。

・ 4 月の学期始めの保護者会と 7 月の保護者会で、各学級の保護者会の前に全体保護者会をもって、少人数学習について説明や成果の報告をしている。

・ 参観日などの授業で少人数学習を行い、保護者に学習の様子を見てもらう機会を多く設定している。

・ 品川ケーブルテレビの学校紹介番組を通して、少人数学習の様子を紹介している。

・ 学校便りでは、学校全体としての取組みを、学年便りでは学年ごとの学習の様子を伝えている。

#### 平成 14 年度

・ 4 月の保護者会では前年度の成果を、7 月の保護者会では一学期の成果を数値で示している。

・ 学校便りでも、習熟度別指導の成果を数値で具体的に表し、学年便りでは児童の学習の変容を伝えている。

・ 参観日や学校公開日の授業で習熟度別指導を多く設定し、指導の実際と児童の様子を保護者に見てもらうことにより理解を得るよう努めている。

### (2) 品川区立第二日野小学校

#### 教職員間の共通理解

全児童数 74 名、1 学級 8～18 名の小規模校である。習熟度別指導は、全学年の国語科、算数科で実施している。また、「基礎・基本の時間」と「根っこの時間」の二つの取組みを進めてきている。これらはそれぞれに、ねらいや性格が異なるが、系統的にはつながっている。

「基礎・基本の時間」のねらいは、授業時間内に確実に定着させたい基礎的・基本的内容を習熟度に

応じて重点的に指導し、学力の定着を図っている。

「根っこの時間」のねらいは、意欲の喚起と学び方を学ぶことである。また、特設時間を設定し、一人一人の児童の不十分なところ、もっと伸ばしたいところを保護者の希望を取り入れてコースを選択させ、学力の定着を補完している。

さらに平成 15 年 9 月から、第 5・6 学年で「ステップアップ学習」を実施している。「ステップアップ学習」のねらいは、学力の確実な定着を図ったり、興味・関心に応じて特定分野の優れた能力を伸ばしたりすることである。

### 指導体制

全職員（担任・専科・指導助手・管理職）を中心に学生ボランティアを含めて、複数指導体制をとり、低・中・高学年の学年ブロックで指導を行っている。

2 名の指導助手が週 10 時間入り、年間 350 時間行っている。

低学年 T T，中学年少人数指導，高学年教科担任制で指導を行い、児童の習熟度に応じ、児童に合った学び方で学力を伸ばす指導体制をとっている。

### 時間割

#### ア 第 1～4 学年

- ・基礎・基本の時間 月，火 13:20～13:50
- ・根っこの時間 水 13:00～13:30
- 木，金 13:20～13:50

#### イ 第 5・6 学年

- ・基礎・基本の時間 月，金 13:20～13:50
- ・ステップアップ 月 14:45～15:30
- 火，木 14:10～14:55

### 学習場所

教室，理科室，図書室等で実施している。

### 児童生徒，保護者への説明

保護者に対しては、説明会を開いて学習の方法や内容について説明し、人間形成の場としての理解も図っている。

児童に対しては、全体的な説明と各教科・コースごとの説明を実施している。

### (3) 品川区立富士見台中学校

#### 教職員間の共通理解

全学年において 5 教科の通常授業で五分割の少人数学習における習熟度別指導を実施し、第 2，3 学年においては特別授業で選択習熟度別指導を取り入れている。実施教科は、国語，社会，数学，理科，英語である。

生徒の多様性に合わせた授業を行うことで教職員の共通認識をもって習熟度別指導を進めている。

### 指導体制

校長を始め全員で取り組んでいる。実際の授業担当は教頭，教諭，講師である。平成 13 年度から、東京都教育委員会研究推進校として指定を受け、正規の教員を 5 名加配されている。

### 時間割

少人数指導については 5 グループに分け、グループ毎の時間割を作成している。一学年 3 学級編制であるので、それぞれの学級の時間割に 5 グループの異なる時間割を編成することになるので、合計 15 種類の時間割が一学年に存在することになる。

また、選択習熟度別指導では 2 週間という集中した期間に 6 時間を取り、授業を行っている。2 時間連続の場合もあり、担当教師がそれぞれ工夫を行って授業をしているが、この場合生徒の集中力が持続できないなどの問題点も出ている。

### 学習場所

普通教室，特別教室，図書室，被服室，会議室，マルチルーム，視聴覚教室，パソコン室などを利用している。広い机や二人がけの椅子の場合、集中できないなどの問題が生じている。普通教室が望ましい。

### 児童生徒，保護者への説明

生徒に対しては、各教科・コースのねらいを示し、一人一人の習熟度をより高めるための学習であることを説明している。保護者に対しても説明会等で編成等について知らせている。

### (4) 品川区立荏原第三中学校

#### 教職員間の共通理解

平成 12 年度から全学年の数学で習熟度別指導を実施してきている。最初は数学が専門である校長が構想を練り、学習の指導をしたり教材を作成したりしてきたが、その後、数学科担当が中心となり実践を重ねてきている。また、現在は数学に加えて英語でも実施している。

全学年で実施している理由は、学習の仕方を身に付けさせるには、特定の時期だけの指導ではなく、3 年間意図的・計画的に継続して指導することが必要であると考えているからである。

教職員間の共通理解として、次の 2 点を確認して実践に入っている。

### 習熟度別指導実施の理由

生徒はだれもが分かりたい、できるようになりたいと願っているからこそ、いっそう「分かる」授業づくりが求められている。しかし、授業に対する生徒一人一人のレディネスが異なっていることも事実

である。したがって、生徒がもっているつまずきに対応した指導を行い、「分かる」喜びを味わわせるには、生徒自らが解決することにより、自分にもできるという自信と意欲を湧かせる学習の場を創り出そうと考えたのである。

また、数学はできる、できないがはっきりする教科であると同時に、分かり始めれば、分かることが自分自身で体感でき、意欲的に学習に取り組むようになる教科でもあることから、次の2点を重視した習熟度別指導を行うこととしている。

1点目は、やればできることや分かる喜びを味わわせ、学習は楽しいという体験を通して生徒一人一人に学習意欲をもたせる。

2点目は、そのために、生徒の学習を見守り、分かり方を気付かせ、必要なときに手助けできる環境をつくる。

### 習熟度別指導の考え方

習熟度別指導を通して「学び方を学ばせる」ことをねらいとしている。「学習の仕方」を身に付けさせることが「生きる力」を身に付けることになると考えるからである。習熟度別指導は、次の三つの意味をもたせて実施している。

- ・生徒自身による理解度診断学習である。
- ・自らつまずきを発見し、自己解決させる学習である。
- ・つまずきの自己解決を通して、学習の仕方を身に付けさせる学習である。

生徒が習熟度別学習を通して身に付ける力は、自己の能力と学習グループを適切に「判断する力」、学習の振り返りから「課題を発見する力」、課題を自力または友人か指導者の支援を得て解決する「課題解決力」の三つである。さらに、課題解決過程の振り返りから、「課題解決力」となる「学習方略(学習の仕方)」も身に付けることができ、これら四つの力は生きていくうえで必要かつ大切な力として、生徒一人一人に確実に習得させることを目指している。

### 学習相談ができる場の設定

授業内で解消できなかったつまずきがある生徒には、解決できる場を授業外に用意する必要がある。つまずきの解決支援だけでなく、学習の仕方の相談に乗るなど学習支援を目的とし、毎週、特定曜日の放課後に時間を決め、学習相談室を開設している。

### 指導体制

普段はT Tによる一斉指導を行い、習熟度別指導時には、授業交換等を行い、指導に加わる数学科教員と校長が協力し行っている。それに加えて指導助

手が入るときもある。また、英語科では、ALTの来校に合わせて習熟度別指導を実施している。

### 時間割

習熟度別指導のための特別の配慮はしていない。

### 学習場所

教室、視聴覚教室(英語科の授業)を使用している。

### 児童生徒、保護者への説明

保護者や地域の方から習熟度別指導が正しく理解されるために、実際の姿を参観してもらうことにしている。例えば、学期に1回行う学校公開の際に習熟度別指導の授業を公開している。最初は、移動する生徒の姿を見る参観者の視点に「できる」「できない」という意識があるので、授業公開の際、授業開始時に行う学習グループへの移動の姿を見せないよう配慮していた。今では、自ら選んだグループで自分のための学習に集中して取り組む生徒の姿と、教室内をこまめに動き回って個別指導に当たる教員の姿を目の当たりにした参観者からは、驚きの声と感謝の声が寄せられている。

## 2 学習集団

### (1) 品川区立伊藤小学校

#### 習熟度別学習集団の編成時期

単元によって展開方法が異なっており、一斉指導や学級二分割と組み合わせながら展開しているため、編成時期は多様になっている。

#### 習熟度別学習集団の編成方法

少人数学習集団の種類を次のように考えている。

#### ア 異質集団・・・無作為分割、意図的分割

様々な個性や能力を持った児童が混在している集団をいう。(単純分割)

#### イ 同質集団・・・習熟度別分割

一部分の能力が同じ(実際には近い水準)児童の集団をいう。

#### 異質集団を編成する上での配慮事項

学力テスト、レディネステスト、前関連単元の評価などのデータを基に編成する。

学級、学年内の人間関係や学習態度等を考慮する。

#### 同質集団を編成する上での配慮事項

テストや作業の結果を基にして絶えず自己評価させ、自分で学習コースを選択できるようにするなど、自己評価能力を高めるようにする。

それぞれの習熟のコースに合った教材や問題を工夫する。

他の児童が肯定的に見ることができるよう教育

環境作りをする。

習熟度別学習集団の編成方法としては、次の二つの方法で行っている。

- ・学級の枠を越えて三・四分割する。
- ・学級内を二分割する。

### (2) 品川区立第二日野小学校

#### 習熟度別学習集団の編成時期

年度始めに編成している。

#### 習熟度別学習集団の編成方法

基本的には、低・中・高学年2学年ごとの異学年集団を3グループに分けて編成している。

児童と保護者が相談して選択し、必要に応じて担任が相談にのるようにしている。

### (3) 品川区立富士見台中学校

#### 習熟度別学習集団の編成時期

単元ごとの習熟度別指導は一学期が始まる前に編成する。選択習熟度別指導は9月、12月、3月の3回に分け、それぞれ6時間から12時間実施し、編成はそれぞれの実施前に行く。

#### 習熟度別学習集団の編成方法

単元ごとの習熟度別指導は全学年の生徒を対象に、選択習熟度別指導は第2、3学年それぞれの学年全員に対し編成を行う。

単元ごとの習熟度別指導は、教師が生徒の学力、人間関係、学習状況等を検討し、学力的に均等で学習しやすい状態が保てるグループ編成を行い、生徒に発表している。その際生徒の希望は反映されていない。また、選択習熟度別指導は生徒が希望を出し、定期考査の結果を基に教師がアドバイスをを行い、教科担当者が希望者の習熟度を確認した後、人数調整を行い編成している。

### (4) 品川区立荏原第三中学校

#### 習熟度別学習集団の編成時期

単元ごとに編成している。

最初に選択したグループの内容のレベルが自分に合っていないと判断したとき、グループ変更を可能としている。しかし、グループの決定には、友人等の人間関係や精神面が影響を与えていることも事実である。このような生徒の心理を考慮し、指導中に学習グループに合っていない生徒を発見した場合でもコース変更を強要しないことにしている。合わないレベルでの学習は自分のためにならないことを自覚させるために個別に指導して、生徒自らが学習途中でコースを変更するようにしている。

#### 習熟度別学習集団の編成方法

##### ア 4グループによる編成

学習内容に対する到達目標と、学習時に示すつまずきの様相とから習熟の程度を4段階、AからDの4グループに編成している。Aは最も基本的な問題を解くグループ。Bは基本の定着を目的としたAより少しむずかしい問題を解くグループ。Cはやや応用的な問題を解くグループ。Dは発展的な問題を解くグループである。ただし、学習内容とねらいに合わせてグループ編成の仕方を変えるなど、効果的な指導形態となるよう工夫している。

##### イ 生徒の選択によるグループ編成

事前に学習グループ希望申請書を提出させる。生徒には、自分が解決すべき課題は何であることを認識して授業に臨ませたいと考えるからである。つまずき箇所などの自己課題がどこにあるかを発見させるためには、具体的な問題を提示し、判断させることが大切であると考え、図2のように課題発見のためのプリントを作成している。家庭学習として取り組ませることにより、課題の意識化と学習グループの判断・決定を行わせている。

1年生が最初の習熟度別指導を行う際には、学習グループ希望調査問題を自宅に持ち帰らせ、親と一緒に考えて判断し、決めてもよいとしている。

コース別学習希望調査問題	
次の問題をやって、コースを選んでください。	
<b>Aコース</b>	
$(+2) \times (-7) =$	$(-24) \div (-4) =$
$(-3)^2 =$	$-5^2 =$
$(-12) \div (-4) \times 5 =$	$5 - 2 \times 3 =$
<b>Bコース</b>	
$-12 \times 3 / 4 =$	$-4^2 \times (-3) =$
$72 \div (-9) \div (-2) =$	$7 - 3 \times (5 - 2) =$
<b>Cコース</b>	
$(-2) \times (+3) \times (-4) \times (-5) =$	
$3 / 7 \times (-1 / 4) \div (-3 / 8) =$	
$(-24) \div (-2)^3 \times (-3) =$	
$(-6) \times 3 - 16 \div (-2) =$	
<b>Dコース</b>	
$(-3) \times (-2^3) \div (-6) =$	
$12 \times (-5) \times 2 - 4 =$	$-9 - 12 \div (1 - 5) =$
$-4^2 - 15 \div (2 - 5) =$	
切取線	
1年( )組( )番 氏名( )	
今回、私は( )コースを希望します。	

図2 コース別学習希望調査問題

##### ウ 同じ教室内に4グループを配置

指導方法については、図3のように同じ教室内に4グループを配置し、指導には1名または複数の教員が当たる。

指導の際に重視している点は、思考の過程が振り返れるように途中の計算や思考に用いた図などを記

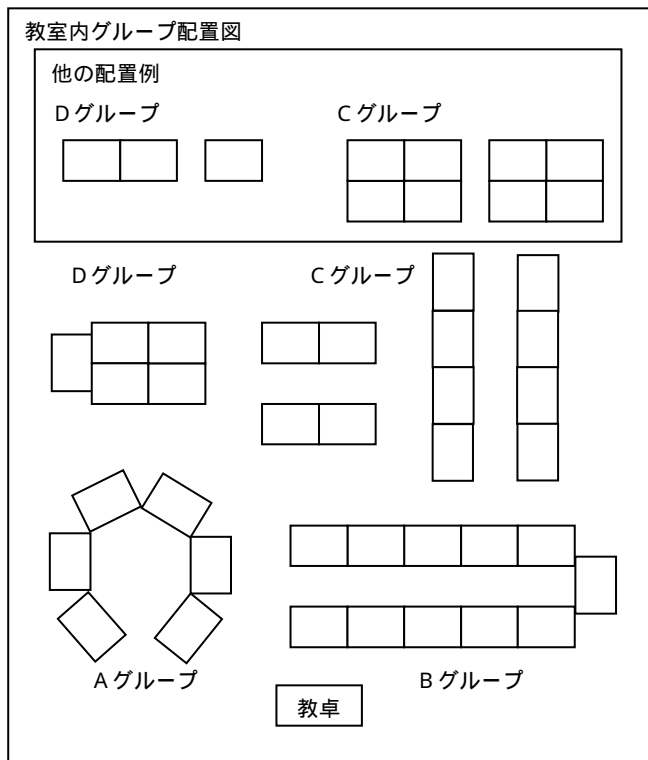


図3 教室内グループ配置図

録として残させるようにしている。誤答から思考過程を遡り、思考の誤りに気付かせるよう配慮し指導している。

A・Bグループは、指導者が机間に入り生徒一人一人の活動を把握し指導しやすいようにしている。

Cグループは、生徒間で共に学び合えるようにしている。

Dグループは、個々で学習したり、生徒間で共に学び合ったりできるようにしている。

最も進んだグループの生徒には、授業の後半に基本及び定着グループの生徒への学習支援を行わせている。教員の手助けをし、仲間の学習のつまずき解消を助けるミニティーチャーである。これは説明する力を付けさせ、より確かな知識を身に付けさせることにつながる。

### エ 協力し合う集団づくり

習熟度に応じたグループ分けは、「できない」ことへの心理的負担感をもっている生徒が必ずいる。このことを踏まえて、前述のミニティーチャーの生徒の発言には細心の注意を払い指導に当たっている。

「まだ、こんな問題解いているのか」「こんな問題が分からないのか」という発言等があった場合は、適切に指導することにより、よい指導者へと変貌させている。生徒同士が教え合うことによる学習効果と同時に互いを尊重し合う人間関係も大切にしている。

## 3 教材

### (1) 品川区立伊藤小学校

国語科は、言語事項や作文の書き方の単元で少人数学習を行い、必要に応じて習熟度に分けている。

算数科は、全領域で少人数学習を行い、必要に応じて習熟度別指導を入れ、学習計画を立てるときに学年担任と相談し見通しを持って実施している。

### (2) 品川区立第二日野小学校

#### 基礎・基本の時間

表1は、「基礎・基本の時間」の計画である。

表1 「基礎・基本の時間」の計画

ねらい	・確実に定着させたい基礎的・基本的内容を重点的に指導し、習熟度に応じた学力の定着を図る。
内容	・国語(書くこと)週2回論理的な作文の書き方を知り、文章表現力を付けるために繰り返し指導する。 ・算数(数と計算)週1回一人一人の習熟度を把握し、習熟度に合わせて計算を中心に指導する。
教材	・国語では「論理的な作文」を年間を通して指導する。書き方の定着(はじめ、なか1, なか2, …) 文の書き方のきまりの定着(句読点, 「」の使い方, 指示語等) 作文を書くための初歩的な練習問題を活用する。 ・算数では到達度が分かる市販のプリントを第1学年から第6学年まで通して活用する。 内容は、基本的に「数と計算」の領域である。
指導体制	・学年ブロックでの複数指導体制(担任, 専科, 指導助手, 管理職)
評価	・国語 個人記録カードに児童の様子や変容を記録する。 ・算数 学習状況一覧表を活用し、学習の進度やつまずきを記録する。一覧表にすることにより、担当が替わっても児童の学習状況が分かるようにしている。

「基礎・基本」を「読み、書き、計算」等の基礎的な知識・技能だけでなく、それを中心に、主体的に学び自分の考えを的確に表現できる力、学び方や問題解決力等を含んだものとしてとらえ実践を行っている。全職員による習熟度別指導を導入し、基礎・基本の定着を図る学習である。

#### 根っこの時間

表2は、「根っこの時間」の計画である。

平成11年度から、特設時間を設定し習熟度別指導に取り組んできている。

この時間の特色は、「計算」「漢字(かな)」「作文」の3コースを設定し選択制にしたこと、保護者の願いを取り入れ児童を育てることに対して共通意識をもつこと、異年齢集団で学習し全教員で一人一人を育てることである。

表2 「根っこの時間」の計画

ねらい	・一人一人の児童の不十分なところ,もっと伸ばしたいところのコースを選択し,学力の定着を補完する。
編成	・児童・保護者のアンケートを基に,教師がコースの中をさらに2コースに分ける。
内容	・計算,漢字(かな) 自分の苦手なところを克服するコースでは,基礎・基本の定着を図る内容に取り組む。 更に自分の力を伸ばすコースでは,発展的な問題に取り組む。 ・作文 実態に応じて,基礎的な語句・文章の理解・文章表現に取り組む。
教材	・計算 復習・応用・発展 つるかめ算,旅人算等いろいろな解き方。 ・漢字(かな) 復習・応用・発展 反復練習,定期的なテスト,漢字の意味調べ,校内漢字検定等。 ・作文 お魚作文,論理的な作文,作文等。 (児童,保護者が学習コースを選択し,教師の考えを合わせて,一人一人の習熟度に応じた学習を行う。)
指導体制	・学年ブロックでの複数指導体制(担任,専科,少人数加配,指導助手,管理職)

### ステップアップ学習

小中一貫校の教育課程編成に向けて,第5・6学年でステップアップ学習を実施している。

ステップアップ学習は,学力の確実な定着を図ったり,興味・関心に応じて特定分野の優れた能力を伸ばしたりする時間である。

指導体制については,基礎・基本の時間,根っこの時間と同様にしている。

内容は,表3のとおりである。

表3 「ステップアップ学習」の内容

教科	コース・学習方法	内 容
国語	基礎・基本コース	基礎・基本の内容に取り組む。 ・漢字の書き取り(下の学年からの復習) ・言葉の使い方 ・文章の書き方の基礎 ・基本的な文法(主語と述語) ・作文の書き方(句読点や行換え等)
	実力向上コース	基礎・基本の充実に取り組む。 ・論理的な作文(文章構成を身に付ける,接続詞や表現等)
	発展コース	・漢字の書き取り(現学年内容中心) 発展的な内容に取り組む。 ・漢字の上級問題 ・古典に学ぶ ・文章題 ・作文(長文,感想文)
算数	基礎・基本コース	今までの学年の内容に取り組む。 ・計算公式 ・単位 ・法則 (その内容に基づく練習問題)

	実力向上コース	現在の学年の内容に取り組む。 ・各領域の問題 ・苦手領域の問題
	発展コース	発展的な内容に取り組む。 ・文章題 ・各領域の発展問題 ・いろいろな問題
社会	テーマを決めて学習	提示されたテーマで学習する。 歴史的分野,地理的分野,公民的分野 それぞれがテーマを決め,それを解決するために学習を進める。
理科	テーマを決めて学習	提示されたテーマで学習する。 実験器具の基本操作,生物とその環境,物質・エネルギー,地球と宇宙 それぞれがテーマを決め,それを解決するために学習を進める。
英語	より英語に親しむ	実際に会話ができる,ヒアリング(聞き取り),簡単な言葉や文章が言えるなど 状況に応じては書くことも取り組む。
音楽	テーマを決めて学習	期間を区切って,歌,器楽等に取り組む。 様々なリコーダーを使ったアンサンブル,八丈太鼓,合唱
図工	テーマを決めて学習	基礎・基本の表現力を身に付ける。 筆箱作り,鉛筆を使った様々な表現方法
家庭	テーマを決めて学習	被服 小物作りを通して,針と糸,ミシンを使う技能を身に付ける。 栄養,調理 用具の使い方を知り,簡単な調理をする。
体育	テーマを決めて学習	期間を決めて,領域ごとに学習する。 陸上運動,器械運動,ボール運動 ・Aコース 各運動の基本的な技能を身に付ける。 ・Bコース 自己の記録や技能向上に取り組む。

### (3) 品川区立富士見台中学校

選択習熟度別指導における教材の工夫は表4のとおりである。

表4 習熟度別指導における教材の工夫

教科	教材の工夫
国語	共通 ・中1で学んだ「文法上の単位」・品詞分類表の確認を最初に行った。 基礎コース ・中1で学んだ文節単語に関する問題を多く取り入れたものを用意。基本的な動詞を実際に活用させる活動を通して学ばせた。 基礎・発展コース ・中1で学んだ文法に関する総合問題を用意。いくつかの動詞を実際に活用させて,活用の種類まで学ばせた。 応用コース ・確認を終えてすぐに,いくつかの動詞を実際に活用させて,活用の種類,変格活用まで学ばせた。 ・応用では,数多く問題に取り組みさせるようにし,基礎では,数を減らし確実に身に付くようにした。

社会	<p>基礎コース</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・中学生としては易しすぎるぐらいの初歩段階のプリントを準備する。</li> <li>・「ひらがなの時代名を漢字に直す」、「人物8人を最低覚える」など、覚えることは「くり返し」なので、同じプリントを何枚も用意して再挑戦できるようにしたり、変化があるように暗記カードを作成したりした。</li> </ul> <p>発展コース</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・パソコンによるクイズ形式の問題も利用した。</li> </ul>
数学	<p>基礎コース</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・短期的だったのでプリント中心となった。数値的に平易なものを使うようにした。</li> <li>・内容の1ステップ毎に、例題と問題演習で1枚のプリントに書き込めるようにした。</li> </ul> <p>基礎・発展コース</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・学力差に応じられるように、応用的な問題を別プリントで用意し、早く終わった生徒が取り組めるようにした。</li> </ul>
理科	<p>基礎コース</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・いきなり計算問題に入ってもなかなか意欲が湧かないと思われるので、まず生徒が夢中になる実験を通して回路について理解させた。たとえを使ってポイントを理解させることに力を入れた。</li> </ul> <p>発展コース</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・既習の内容で解決できる課題を組み合わせる複雑な課題を作ることを心掛けた。また、自分たちの考えを実験で確かめられるような教材を利用した。</li> </ul>
英語	<p>基礎コース</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・全員が同じ練習問題を解いていくが、各自のペースで解いていけるように工夫した。</li> </ul> <p>基礎・発展コース</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・全員が同じ問題に取り組むようにしたが、コース内にも問題を解くペースにかなり差が出てきた。今後、この点を配慮する必要がある。</li> </ul> <p>応用コース</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ミニライブラリーの中から、生徒の興味・関心のある題材を選び教材とした。</li> <li>・英語を通して、「もの、こと」を知り味わい、考えることをさせた。</li> </ul>

#### (4) 品川区立荏原第三中学校

単元ごとに教科担当が作成した問題を使って実施している。

生徒はつまずきを解決し、学習の仕方が分かり始めると、更に難易度を高めた課題に挑戦したくなる。この学習意欲に応えるために、すべてのグループで使用したプリントと解答を持ち帰らせている。全教材を持ち帰らせることは、努力すれば誰でも最高レベルまで到達できるという働きかけである。

### 4 展開方法

#### (1) 品川区立伊藤小学校

##### 一人一人の個性や習熟度に応じた学習過程の工夫

単元の内容に応じて習熟度別学習や課題別学習を効果的に組み入れた学習過程を作り、一人一人の個性や習熟度に応じた指導を行っている。

### 学習集団の編成の仕方及び指導形態の推移

学習集団の編成については、習熟度別指導を軸に実施してきている。次に示すものは、平成13年度から現在まで、実証と反省を重ねながら行ってきた指導形態改善の推移である。

#### 平成13年度

< 1学期 >

ティーム・ティーチングと単元末の習熟度別指導を組み合わせた。

表5 習熟度別指導の基本的展開方法

学級ごとのTT	チェックテスト	チャレンジコース(応用・発展)
		しっかりコース(練習・定着)
		じっくりコース(基礎・復習)

< 2学期 >

学年4分割と単元途中、単元末の習熟度別指導を組み合わせた。

表6 [第4学年 分数(全14時間)]  
「異質集団と習熟度別指導の混合型」

1~4	5	6	7	8~12	13・14
異質集団	チャレンジコース	異質集団	チャレンジコース	異質集団	チャレンジコース
異質集団	しっかりコース	異質集団	しっかりコース	異質集団	しっかりコース
異質集団	しっかりコース	異質集団	しっかりコース	異質集団	しっかりコース
異質集団	じっくりコース	異質集団	じっくりコース	異質集団	じっくりコース

#### 平成14年度

学級二分割の異質集団による学習と習熟度別指導を組み合わせた。

すべての単元の最初に既習事項の復習の時間を設定し、学習にスムーズに入っていけるようにした。

表7、表8は、各教師が考えた展開方法の中の例である。

表7 [第5学年 分数のたし算とひき算(全12時間)]  
「異質集団と習熟度別指導の混合型」

	1~3	4	5	6	7~10	11・12
復習	学級二分割	スピードコース	学級二分割	スピードコース	学級二分割	チャレンジコース
	学級二分割	しっかりコース	学級二分割	スピードコース	学級二分割	しっかりコース
復習	学級二分割	じっくりコース	学級二分割	しっかりコース	学級二分割	しっかりコース
	学級二分割	じっくりコース	学級二分割	じっくりコース	学級二分割	じっくりコース

表8〔第4学年 わり算のし方を考えよう(全10時間)〕  
「習熟度別指導」

1・2		3	4・5	6～8		9・10	
復習	定着	しっかりコース	チャレンジコース	定着	しっかりコース	チェック	チャレンジコース
	基礎	じっくりコース	しっかりコース	基礎	じっくりコース		しっかりコース
			じっくりコース				じっくりコース

## (2) 品川区立第二日野小学校

国語科教育における習熟度別指導，課題別学習の在り方について検討してきている。課題別学習については，選択した課題の中で一人一人の能力に応じた指導に取り組んでいる。

図4は，課題別学習の中に習熟度別指導を取り入れた全体計画の例である。

国語科では，「書くこと」「言語事項」以外に，「読むこと」領域についての習熟度別指導について検討してきている。検討していく中で，次のように文学教材や説明文におけるグループ分け，展開方法が可能ではないかと考え実施している。

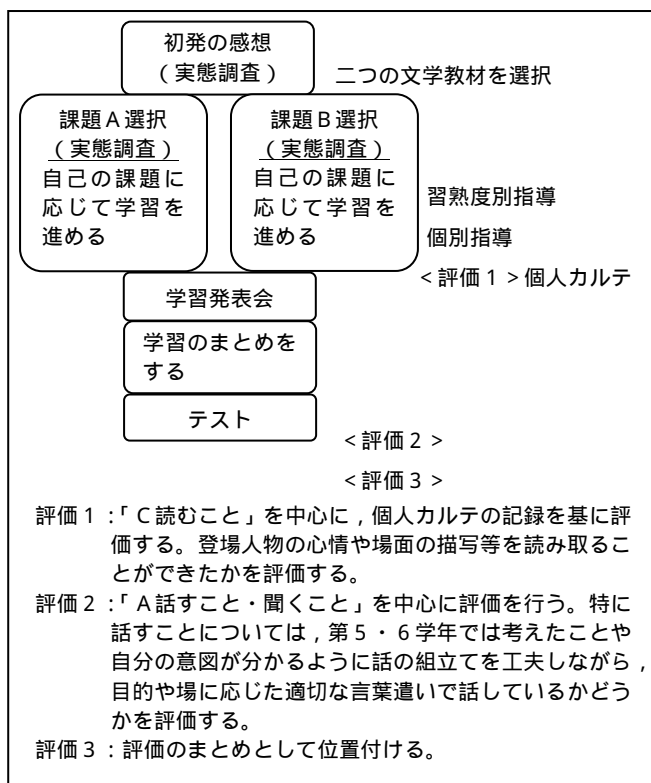


図4 二つの文学教材を選択する課題別学習の全体計画

## 物語文，説明文等の単元の場合(パターン1)

### ア グループ分け

A 文章理解ができる。場面に応じて登場人物の心

情を読み取ることができる。言語事項もだいたい理解している。

B 文章の内容がだいたい分かる。文章解析をすれば，人物の心情や場面の様子が分かる。言語事項は個別指導の必要がある。

C 文章のあらすじ程度は分かる。場面の移り変わりや人物の心情など細かい指導を通して理解できる。

D 文章の内容が分からない。言葉の使い方や表現の意味など，基本的な内容から指導する必要がある。

### イ 展開方法

展開方法は次のとおりである。

表9 パターン1の展開方法

音読調査	グループ分け
音読調査	グループ分け(決定)
習熟度別指導	それぞれのねらいに応じた学習
音読調査	児童の変容をつかむ
テスト	評価

## 物語文等の単元の場合(パターン2)

### ア グループ分け

パターン1に同じ。

### イ 展開方法

展開方法は次のとおりである。

表10 パターン2の展開方法

初発の感想	グループ分け
習熟度別指導	それぞれのねらいに応じた学習
終末の感想	児童の変容をつかむ
テスト	評価

## (3) 品川区立富士見台中学校

第2学年の社会科では，基礎定着を目指すコースにはプリント学習を中心に，応用グループに対しては課題を設定させ，インターネット，図書資料等を活用した課題別学習を行っている。第3学年の理科の実験においては，全員が共通の基礎実験を行った後，その解決状況に応じた発展的な学習を行っている。第3学年の英語科では，まとめの時間においてそれまでの理解度を参考に基礎グループと発展グループとに編成を変え，基礎グループでは，もう一度説明を聞いてから問題に取り組みせ，発展グループではすぐに問題に取り組みせできるだけ早く進める方法をとっている。

選択習熟度別指導における各教科・コースの学習内容は表11と表12のとおりである。

表 11 第 3 学年各教科・コースの学習内容

3 年数学：一次関数とグラフ	
基礎コース	一次関数の表を作る。 表や式から一次関数のグラフをかく。 一次関数のグラフから式を求める。
基礎・発展コース	表や式から一次関数のグラフをかく。 一次関数のグラフから式を求める。 一次関数のグラフについての問題に取り組む。
応用コース	表や式から一次関数のグラフをかく。 一次関数のグラフから式を求める。 一次関数のグラフについて複雑な問題に取り組む。
3 年英語：be 動詞と一般動詞	
基礎コース	文字 (アルファベット)・単語 (基本的なもの) の練習。 be 動詞 (am are is / was were) の使い方を理解する。 一般動詞 (基本的なもの) の使い方を理解する。
基礎・発展コース	be 動詞 (am are is / was were) の使い方を理解する。 一般動詞 (規則動詞/不規則動詞) の使い方を理解する。 進行形の使い方を理解する。
応用コース	be 動詞, 一般動詞に着目して英文を理解することができる。 be 動詞, 一般動詞を活用して英文で自分の言いたいことを表現することができる。 多くの英文にふれ, より早く内容を理解することができる。

表 12 第 2 学年各教科・コースの学習内容

2 年国語：「漢字・音読・文法」	
基礎 (音読から始めるコース)	課題の文章が正しい発音で滑らかに朗読できるようになり, 次に文法・漢字を学習する。
基礎・発展 (漢字から始めるコース)	課題の漢字が読めるようになる。課題の漢字が書けるようになり, 次に音読・文法を学習する。
応用 (文法から始めるコース)	動詞の活用が理解できるようになる。課題の動詞を活用させることができるようになり, 次に漢字・音読を学習する。
2 年理科：「オームの法則」「直列・並列回路」	
基礎コース	電流, 電圧, 抵抗についてよく理解し, オームの法則を使って基本問題を解けるようになる。
発展コース	電流, 電圧, 抵抗の関係について理解を深め, 直列回路と並列回路の複合問題まで解けるようになる。
2 年社会：「歴史の基本事項を徹底して覚えよう」	
基礎コース	歴史の時代名を覚える。 歴史上の人物 30 人 (小学校での既習) の時代と業績を覚える。 各時代の重要事項を理解する。
発展コース	歴史上の人物 70 人の時代と業績を覚える。 各時代の重要事項を理解する。

#### (4) 品川区立荏原第三中学校

一斉指導をして, 単元が終了した時点で習熟度別指導を行うことにしている。

ただし, 必要な場合には, 学習過程の途中 (節終了時) にも取り入れている。

## 5 評価

### (1) 品川区立伊藤小学校

習熟度別指導は, 児童がテストの結果等を見ながら自己評価し, 自分で学習するコースを選択して, 自分にとって必要な学習ができるように工夫している。すなわち, チェックテスト 自己評価「ふり返りカード」 コース選択 (自己選択) 習熟度別学習 (自分に適した学習) の流れで, 習熟度別指導を行っている。

図 5 は, 児童が自分でコースを選択するために用いる自己評価カードである。

学習したこと		4 年 組	
わり算の筆算を考えよう			
1 計算をしましょう 2 けた ÷ 2 けた			
検算	検算	検算	検算
3 けた ÷ 2 けた			
検算	検算	検算	
2 文章題			
式	答え	筆算	
3 文章題			
式	答え	筆算	
4 ことば			
	商	積	
	たてる	かける	ひく おろす
学習のふり返り (自分の感想)			
もっと学習したいこと (自分が学習したいコースに をつけましょう。)			
じっくりコース	しっかりコース	チャレンジコース	
学習したことを教科書を使ってもう一度じっくり考え, わり算の筆算のしかたを友だちや先生といっしょに学習し, 自分で解けるようにします。	学習したことを復習し, わり算の筆算のしかたをしっかりと学習し, 計算プリントを使って確実に計算ができるように学習していきます。	学習したことをもとにわり算の筆算について自分のやり方を説明したり話し合ったりして, 発展問題にチャレンジします。	

図 5 ミニテストふり返りカード

「ふり返りカード」では, 現在の自分の力が分かり, これからどんな学習が必要なのかが分かるように, カードの内容を工夫している。

成果として, 児童は優越感や劣等感をもたずに習熟度別学習に取り組んでいる。また, 自己評価を繰り返す中で, 多くの児童が自分に合ったコース選択をすることができるようになってきている。

## (2) 品川区立第二日野小学校

児童一人一人の学習の様子をより具体的に把握するために「個人カルテ」を活用している。その結果、授業ごとの児童の変容、単元を通しての変容など児童の様子を幅広くとらえることができ、授業内での児童のつまずきや伸びているポイントも具体的に把握できるようになった。

課題としては、各教科、活動の評価項目の検討を挙げている。さらに、評価方法について、具体的なつまずきがわかるチェック表のようなものを用いた評価も検討している。

## (3) 品川区立富士見台中学校

少人数学習については、生徒自己評価アンケート、保護者による評価アンケート及び教職員による評価アンケートで評価している。また、選択習熟度別指導については、生徒自己評価アンケート、確認テストによる事前と事後の結果比較及び観察法による生徒の様子から評価している。

## (4) 品川区立荏原第三中学校

表 13 に示す「観点別評価カード」を用いて、単元末、時期をおいての再評価時（学期末や確認テスト時等）、年度末に評価をしている。また、その評価を日頃の学習指導、習熟度別指導、総括的评价等に生かしている。

表 13 観点別評価カード

		平成 年 月 日			
		品川区立荏原第三中学校			
		第 2 学年 観点別評価カード (2 年数学)			
		単元名: 第 1 章 式の計算			
		2 年 組 番 名前			
題材	評価の観点	評価規準	評価		
			単元末	再評価	年度末
式の計算	数学への関心・意欲・態度	忘れ物、提出物などをなくし、積極的に授業に参加しようとしている。			
		文字式の計算に関心を持って取り組もうとする。			
		事象の中の数量関係を見だし、それを文字を使って表現しようとする。			
	数量・図形についての知識・理解	単項式、多項式、式の次数の意味を理解している。			
		文字式の計算の仕方を理解している。			
		式の値を求めることの意味を理解している。			
		等式変形の仕方を理解している。			

## 6 成果

### (1) 品川区立伊藤小学校

初めて習熟度別指導を実施した平成 13 年度の第

3～6 学年について、教研式全国標準学力検査 T 形式を実施し、偏差値の変化を臨界比の基準値(1.65)と比較している。その結果が、表 14 である。

表 14 算数科における偏差値の伸び

	学年	H13.7	H14.5	偏差値の伸び	臨界比の値
算数	3 年	47.2	50.6	+ 3 . 4	+ 2 . 3 6
	4 年	50.8	51.6	+ 0 . 8	+ 0 . 6 1
	5 年	51.5	52.3	+ 0 . 8	+ 0 . 5 5
	6 年	45.2	47.4	+ 2 . 2	+ 1 . 7 4

ただし、第 6 学年の 2 回目は平成 14 年 2 月に実施

第 3 学年と第 6 学年では、1 年間での算数の学力の伸びが確認できている。また、第 4 学年と第 5 学年では偏差値が伸びており、算数の学力が伸びている傾向がある。また、自分から学習に取り組んだり、算数の計算に自信をもったりしたことで、「自分にも分かる、できる」という意識が高まり、国語の漢字練習や作文などにも自らががんばる姿が見られ、学習への関心・意欲も高まっている。

### (2) 品川区立第二日野小学校

集団におけるおおむね良好の正解率の基準を次のように設定し、校内学力定着度調査を実施している。

- ・基礎・基本問題：70%
- ・応用問題：60%
- ・チャレンジ問題：40%

平成 15 年度の結果は、表 15 のとおりである。

表 15 平成 15 年度校内学力定着度調査の結果

国語	基準を 5～30% 上回った問題数	3 3 / 4 3 問
	基準を下回った問題数	4 / 4 3 問
算数	基準を 5～40% 上回った問題数	2 2 / 3 1 問
	基準を下回った問題数	9 / 3 1 問

「基礎・基本の時間」、「根っこの時間」を設定したことで、着実に基礎的・基本的な学習内容が身に付いている。

### (3) 品川区立富士見台中学校

第 3 学年の数学科では、習熟度別指導の最初と最後で到達確認テストを実施している。基礎コースの生徒は全員が、基礎・発展コースの生徒は 15 名中 11 名が、発展コースの生徒は 18 名中 6 名が正解数を伸ばしている。ただし、発展コースの生徒の内 8 名は最初の段階で全問正解の生徒である。伸び悩んだ生徒の最初の段階の正解数をみると、明らかにコース選択を誤った生徒が多い。

また、英語科の基礎コースの生徒は、疑問文の作り方の理解が最初全員できていなかったが、10 名中 7 名が理解するようになってきている。基礎発展コース

の生徒は、到達確認テストの正解数にあまり変化はなかったが、アンケートでは分からないところが分かるようになったと答えた生徒が16名中14名いる。発展コースの生徒全員が、動詞の基本文法の問題を80%以上正解している。

さらに、第2学年の理科では、実力テストの平均点が前回に比べて基本コースで12.5点、発展コースで10.5点上げている。

#### (4) 品川区立荏原第三中学校

荏原第三中学校では、数学の問題を解く場合、その過程を書くことを大切に、過程からつまずきの自己解決を通して、学習の仕方を身に付けるようになってきている。

### 分析と提言

ここでは、五つの視点から分析と提言をし、習熟度別指導の実施に係る視点・方法を明らかにしたい。

また、図6は、基礎・基本の確実な習得のために、習熟度別指導を五つの視点からどのように実施していくかをまとめたものである。

## 1 学校体制

まず、ハード面について述べる。

指導者の確保については、伊藤小学校や富士見台中学校のように教員の加配を受けている学校がある。これらの学校では、少人数指導や習熟度別指導のための加配教員を活用している。また、4校とも指導助手（品川区が習熟度別指導のために配置した助手）を確保している。伊藤小学校では、教育実習生であった学生のボランティアを活用している。

教室の設備については、4校とも既存の教室や特別教室等を工夫して利用している。1クラスを複数の習熟度に分けた場合は、1グループで一つの教室を使用したり、複数のグループで一つの教室を使用したりしている。

ハード面についてまとめると、次のようになる。

・指導者を確保する場合、先に年間指導計画を立て、必要な時間数や人数を打ち出し、計画的に確保することが大切である。このことが、より有効な指導につながってくる。教師以外の者が指導に当たる場合、教師の十分な計画・指導の基に、教師と指導者が十分な連携をとる必要がある。

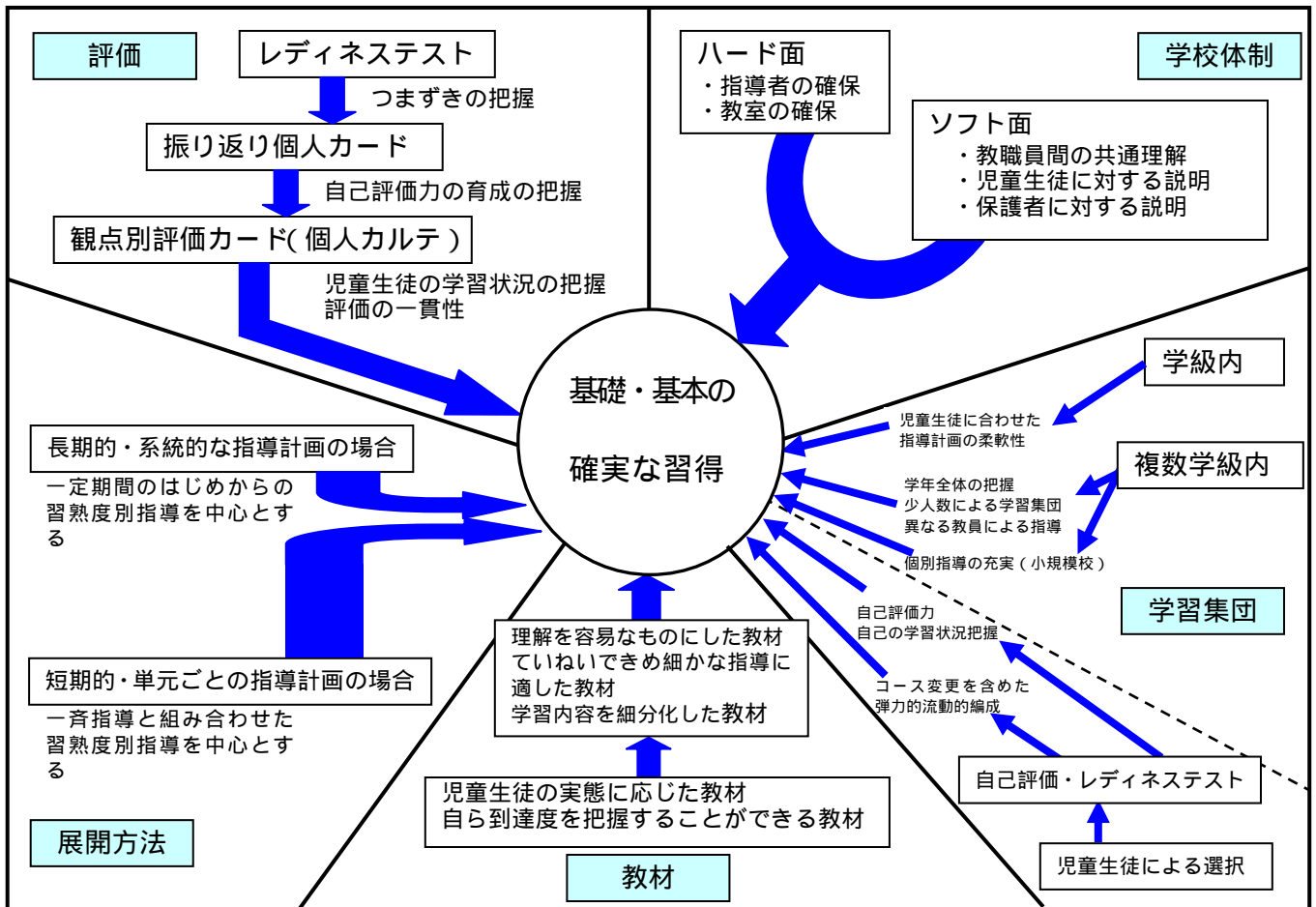


図6 習熟度別指導の実施に係る視点・方法

・教室の配備については、授業の計画を立案する際に、その授業の目的によって形態を考える必要がある。また、机の大きさや座席の配置など、学習環境について配慮するようにする。

次に、ソフト面について述べる。教職員間の共通理解を図る方法の工夫については、4校とも、習熟度別指導を実施する前に、校内研修を充実させている。児童生徒に対する説明では、ガイダンスをていねいに実施している学校が多い。保護者に対しては、保護者会で説明するだけでなく、学校便りやケーブルテレビ、Web ページなど、多くの機会を利用している。特に、伊藤小学校や荏原第三中学校では、習熟度別指導の授業参観を積極的に実施している。

ソフト面についてまとめると、次のようになる。

・教職員が、その学校における習熟度別指導のねらい、方法、評価（評価の場面、評価規準、評価方法等）等について十分に理解するようにする。この場合、各学校の研究担当を中心に校内研修を進め、理論研修や研究授業等を通して、共通理解を得る。また、習熟度別指導の基本的な学習展開について研修し、すべての教員が共通実践することを通して共通理解を深める方法もある。実施段階においては、節目ごとに教職員が情報交換を行い、必要に応じて展開方法や教材の修正を行うなど、成果と課題を明らかにしながら進めることが大切である。

・児童生徒に対しては、習熟度別指導を行う目的や方法を理解させる。習熟度別指導の実施途中では、児童生徒が担任や教科担当に相談したり学習相談室等を活用したりして、目的を見失わせないように工夫する必要がある。

・保護者に対しては、習熟度別指導の目的や方法、あるいは実施経過を説明する。児童生徒が真剣に学習している姿を保護者に見せることによって保護者の理解を深めることができる。

今回取り上げた実践は、ハード面とソフト面において、すべての学校で工夫がなされており、ハード面とソフト面は車の両輪の関係にあるといえ、習熟度別指導を行う上で両者の工夫が必要である。

## 2 学習集団

まず「どこ」を学習集団に編成するかについては、学級内を基にして編成しているのが荏原第三中学校である。学級を四分割にして編成している。

同一学年の複数学級を編成しているのが、伊藤小学校と富士見台中学校である。それぞれ三・四分割と五分割にして編成している。

異学年の複数学級を編成しているのが第二日野小学校である。この学校は、児童数が1学級8から18

名の小規模校であり、その特色を生かし、低・中・高学年別に三分割して編成している。

「どこ」を学習集団に編成するかについてまとめると、次のようになる。

・学級内を編成する場合、学級あるいは個々の生徒の状況を把握しながら、指導計画を柔軟に調整し授業を実施できる。また、この学習集団の編成の効果として、習熟度別指導が進む中、生活集団でもある学級での授業時数が少なくなり、生徒間の人間関係や所属する集団の一員としての自覚等が問題視される状況を減少させるという面もある。

・同一学年の複数学級を編成する場合、分割する数は担当できる教員の数にもよるが、学級数よりも大きな数であり、少人数の習熟度別学習集団にすることで学習の成果を上げることができる。学習集団の担当をローテーションで回すことで、指導者は学年全体を把握でき、児童生徒はいろいろな教員から指導を受けることができる。

・異学年の複数学級を編成する場合、小規模校での教員数が少ない体制の中で、習熟度別指導を実施していく工夫の一つとして評価できる。児童数が少ないため、習熟度別指導と個別指導を十分に機能させることができる。

次に「だれ」が学習集団を編成するかについては、基本的には4校とも、児童生徒が保護者の意見を聞いたり、教師の助言を聞いたりして、希望するコースを自ら選択することによって、編成されている。伊藤小学校の「ミニテストふり返しカード」のような自己評価や荏原第三中学校の「コース別学習希望調査問題」のようなレディネステストなどが有効である。さらに、荏原第三中学校では、指導者が「観点別評価カード」で観点別評価をしている。

最後に、学習途中でのコース変更についてである。習熟度別指導は、児童生徒の実態に合わせて、弾力的、流動的に行う必要がある。

「だれ」が学習集団を編成するかについてまとめると、次のようになる。

・留意しなければならないのが、児童生徒に習熟度別指導のねらいや方法を理解させておくことである。また、自己評価力を身に付けさせ、自分の学習状況を把握したり、課題をつかませたりすることが大切になってくる。児童生徒の学習状況を把握し指導に生かすことが大切である。

・習熟度別指導を行い、児童生徒自身の学習状況が内容とそぐわない場合、コースを変更させる必要がある。この場合、児童生徒に学習状況を自覚できるように様々な評価だけでなく個別に指導していくことが大切となってくる。

## 3 教材

実践校のうちで習熟の程度の高い児童生徒に応じ

た教材と習熟の程度の低い児童生徒に応じた教材を分けて作成しているのは、第二日野小学校、富士見台中学校（第2，3学年）、荏原第三中学校である。

一般的に、共通の問題と応用問題を別プリントで用意し、共通の問題が早く終わった児童生徒に応用問題を行わせるという方法がとられている。また、富士見台中学校のように、習熟の程度の高い児童生徒には、数多くの問題に取り組みせ、習熟の程度の低い児童生徒には、問題の数を減らし確実に身に付くようにする方法も参考になる。

具体的な方法としては、前者では第二日野小学校、後者では荏原第三中学校のようにすべての学習グループの問題を持ち帰らせる方法がある。

いずれにせよ習熟度別指導を行う際に使用する教材は習熟度別指導の効果を左右する大きな要因の一つである。教師自身が児童生徒の実態を正確に把握し、ねらいに即した教材を作成することが大切である。

教材づくりについてまとめると、次のようになる。

・習熟の程度が高い児童生徒には、学習内容をより深めるもの、学習内容を広げるもの、そして学習を先に進めるものを教材として作成するようにする。また、習熟の程度の低い児童生徒には、個別指導や少人数指導などでいねいできめ細かな指導に適した教材、視聴覚教材や具体物などを多く活用して理解を容易なものにした教材、あるいは学習内容を細分化した教材を作成するようにする。

・習熟度別指導において使用する教材について留意すべき点は、興味・関心など児童生徒の実態に応じた学習ができるものであることと、児童生徒が自ら到達度を把握することができるものであることである。

#### 4 展開方法

一定期間（年度、学期、単元ごと）のはじめからおわりまで習熟度別指導を展開しているのは、伊藤小学校、第二日野小学校の2校である。まず、伊藤小学校の平成14年度第4学年「わり算のし方を考えよう」の単元があげられる。レディネステストや関連単元の評価等を基にして、単元のはじめから習熟度別指導を展開している。次に、第二日野小学校の「基礎・基本の時間」「根っこの時間」「ステップアップ学習」があげられる。年間を通して、各コースの学習内容を計画し実施している。学習の効果を上げるためには長期的な学習が必要であるという考えから、年間を通して実施しているところが特徴である。

次に、1単位時間や1単元、一つの学期の中で、

一斉指導と習熟度別指導を組み合わせで展開しているのは、4校すべてである。伊藤小学校では、算数のすべての単元で習熟度別指導を行っており、いつ習熟度別指導の展開にするかについて単元ごとに指導計画を立てている。当初、はじめに一斉指導を行い、その後に習熟度別指導を展開するという基本的な展開方法を取り入れ、その後、学習内容に合わせた展開方法を単元ごとに工夫して様々なパターンを考え出している。また、第二日野小学校では、通常、の国語と算数の授業の中で習熟度別指導を取り入れて展開している。国語科の説明文や物語文の実践では、課題別学習の中に習熟度別指導を取り入れ、学力の定着を図っている。富士見台中学校では、各教科の特性を生かしてそれぞれの展開方法を工夫している。荏原第三中学校では、単元の最後に習熟度別に問題を解き学力の定着を図っている。

なお、特例としては、富士見台中学校の「選択習熟度別指導」がある。定期テストの結果を基に、9月、12月、3月の3回、2週間（6時間）に集中して実施しているのが特徴である。

展開方法についてまとめると、次のようになる。

・多様な展開方法が考えられ実践されており、習熟度別指導について、一定期間のはじめから行うのがよいのか、一斉指導と組み合わせで行うのがよいのか、一概に言うことはできない。指導内容や指導期間に応じて展開方法を選択し、よりよい指導計画を作成することが必要である。

#### 5 評価

評価の大きな目的に、指導後に個々の児童生徒が学習目標に到達しているかどうかを見極めることがある。富士見台中学校の「確認テスト（事前・事後）」と「生徒自己評価アンケート」を併用する評価の取組みは、指導者が行う形成的評価及び観点別評価と、児童生徒自身による自己評価を併用した例として参考になる。

さらに、習熟度別指導における評価の結果は、学習集団の編成替えをするための資料としての側面をもつ。荏原第三中学校の「コース別学習希望調査問題」のようなレディネステストを実施して、その結果を基に生徒にコースを選択させる方法がそれにあたる。

伊藤小学校の「ミニテストふり返しカード」は、コースの自己選択はもとより、自己評価力を身に付けていく上で有効と考えられる。

一方、荏原第三中学校の「観点別評価カード」は、単元ごとに評価規準が示されているため使いやすく

なっている。

評価についてまとめると、次のようになる。

- ・習熟度別指導における評価では、その意義である「個に応じた指導」を目指す意味から、単純に目標を達成したか否かではなく、個々の児童生徒の変容ぶりに着目した伸長度評価が重要となる。
- ・指導者は、レディネステストから生徒のつまづきを把握し指導に生かすようにする。
- ・指導する側には、児童生徒一人一人の学習状況を把握するための資料づくりが欠かせない。その意味から個人カルテのような学習の進捗や児童生徒のつまづきを記録した資料の効果は大きい。また、編成替えによって担当教師が替わっても評価の一貫性が保てるように、学習状況一覧表のようなすべての児童生徒の学習状況をまとめた資料を作成するといった工夫が必要である。
- ・児童生徒には、個人カードのような学習の理解度や自分のつまづきが一目で分かるものを作成させることが効果的である。所属する学習集団が自分に合っているか、学習の成果は上がっているかを児童生徒自身で判断させるために、自己評価力を身に付けさせる必要がある。

## おわりに

本研究では、基礎的・基本的な内容の確実な習得を図るための指導方法・指導体制としての習熟度別指導に着目して研究を進めた。先進的な取り組みをしている品川区立伊藤小学校、品川区立第二日野小学校、品川区立富士見台中学校、品川区立荏原第三中学校の実践を基に、学校体制、学習集団、教材、展開方法、評価の視点から習熟度別指導の実施に係る視点・方法を探ることができた。また、習熟度別指導の成果についても明らかにすることができた。

習熟度別指導は多様な方法が考えられ実践されているが、今回の調査学校では共通して認識されていることがあった。それは、「はじめに習熟度別指導ありき」の考え方ではなく、あくまで「習熟度別指導は指導方法の一つである」という考え方である。言い換えると、「目的と手段とをはき違えてはならない」ということである。基礎的・基本的な内容の確実な習得が目的であり、習熟度別指導はその目的を達成するための一つの手段である。習熟度別指導を実施することを目的とすると、いかに多く習熟度別指導を取り入れていくか、教員の加配があるからいかに習熟度別指導の時間を多くつくるかということにもなりかねない。

基礎的・基本的な内容の確実な習得を考えたとき、指導形態や指導方法・指導体制として、習熟度別指

導の他に少人数指導、個別指導、課題別学習、チーム・ティーチングなどが挙げられる。これらを関連づけたり組み合わせたりして展開することで、より有効な指導が可能となり、加配教員の活用も有効なものになるといえよう。今回の4校の実践はこの点で参考にすべきところが多くあるといえる。各学校においては、これらの実践を参考にして独自の指導方法・指導体制を工夫改善していただきたい。

## 引用文献

- 岩崎三郎(平成14年):奥田眞丈編(平成14年)『教育展望 5月号 521号特集少人数・習熟度別学習の課題』,教育調査研究所,p.23
- 工藤文三(平成13年):『教職研修 10月号増刊総合特集発展的学習の指導の手引き』,教育開発研究所,p.21
- 安野功(平成13年):工藤文三編(平成13年)『教職研修 10月号増刊総合特集発展的学習の指導の手引き』「少人数指導をどう工夫するか」,教育開発研究所,p.110

## 参考文献

- 文部科学省初等中等教育局教育課程課(平成13年):『初等教育資料』9月号 741,東洋館出版社
- 文部科学省編(平成14年):『文部科学時報 3月号 1510特集新しい学習指導要領のねらいの実現に向けて』,ぎょうせい
- 生涯学習政策局調査企画課(平成11,15年):『教育指標の国際比較』,財務省印刷局
- 加藤幸次・河合剛英(2002):『小学校個に応じる少人数指導』,黎明書房
- 児島邦宏(2002):『中学校少人数指導実施の手引』,明治図書
- 北俊夫(2003):『基礎・基本の定着と補足的・発展的な学習のための指導のアイデア集』,光文書院
- 小島宏(2003):『小学校少人数指導の評価』,教育出版
- 安彦忠彦(1999):『自己評価を生かした授業の創造』,明治図書
- 水越敬行(1985):『授業改造と学校研究の方法』,明治図書
- 富山県総合教育センター(平成15年):『平成14年度研究紀要』第21号「効果的な少人数授業の在り方の研究(第2報)」
- 滋賀県総合教育センター(平成15年):『平成14年度研究紀要』「学習意欲と理解力が高まる算数・数学科の指導」
- 福島県教育センター(昭和56年):『習熟度別学習研究の手引』
- 教育技術中央研究所編(2002):『授業研究 21 4月号 543号特集「習熟度」の違いに対応する授業づくり』,明治図書
- 吉崎静夫編(平成14年):『教職研修 6月号増刊多様な指導方法への経営戦略』,教育開発研究所
- 工藤文三編(平成15年):『教職研修 11月号増刊今日から始める習熟度別指導の基礎・基本』,教育開発研究所
- 奥田眞丈編(平成14年)『教育展望 5月号 521号特集少人数・習熟度別学習の課題』,教育調査研究所
- 恒吉宏典編(2000):『重要用語 300 基礎知識』第2巻「習熟度別編成とは」,明治図書